



YAMAHA

Hamamatsu Marine Maker

マリンレジャー文化を世界に発信
 新たな感動と豊かな生活を世界中の人へ



TOPICS
過去最高額!1億円超えクルーザーが登場

「ジャパンインターナショナルボートショー2018」で、ヤマハは超高級ボート「EXULT イグザルト」シリーズのフラッグシップ「イグザルト43」を発表した。ヤマハボートのDNAである高い走行性能に加え、随所に高級素材と日本らしい匠の技が導入されており、まるで高級ホテルのような居住空間を演出。1億4,700万円にも及ぶ本体価格と、卓越した装備に世界中のメディアが注目。初年度の国内販売計画は4隻で、第1号艇がボートショーで展示された。



PICK UP!①
ノルウェーサーモン
養殖業を支えるHonda船外機

いけすに接舷したり、重量物を引きながら移動したり、後進しながら微妙な位置調整を行ったりと、海面でさまざまな作業を行うサーモン養殖業。作業ごとに場所が異なるので全速力で海面を移動する。これを毎日繰り返し行うのだが、そのエンジン稼働時間は年間になると1000時間以上にも及ぶ。大自然を相手にする動力だからこそ、耐久性とパワーを誇るHonda船外機が選ばれているのだ。



PICK UP!②
タイプーケットの楽園
「ピビ島」ビーチリゾートでも活躍

レオナルド・デカプリオ主演 映画「ザ・ビーチ」のロケ地となり、白い砂浜と透明度抜群のエメラルドグリーンの海に囲まれたピビ島。世界各国から楽園を求め1日約4,000人がこの島を訪れる。ピビ島へは近くのプーケット島からボートで行くことができるが、多くのボートオーナーがHonda船外機を選択する。楽園を守る環境性能、また毎日欠かさず観光客を輸送できる信頼性。まさにHondaの信念が受け入れられている現場である。

HONDA

Hamamatsu Marine Maker

創業者の「水を汚さない」信念から生まれた、
 世界のプロも選ぶHonda船外機

本田技研工業が初めて船外機を発売したのは1964年。働く人々の重労働を軽減し、暮らしを豊かにする「道具」を生み出していきたくとの思いから、二輪車、汎用エンジン、耕うん機に続く第4のカテゴリとして船外機を発売した。その頃は、まだ水中にオイルを放出する2ストローク船外機が主流だったが、創業者の本田宗一郎氏は、あえて重量やコストなどでハンディのある4ストロークで世界へ参入。海で働く人を助けるために開発したエンジンが、仕事場の環境を汚すことはあつてはならないとの強い信念があったからだ。その精神を受け継ぎ「人と環境に優しく、経済的で高品質」をコンセプトに進化を続け、名機と呼ばれる数多くの4ストローク船外機を世界に送り出している。そ



「水上を走るもの、水を汚すべからず」本田宗一郎氏の考え方である

の性能への評価は非常に高い。浜名湖に面した細江船外機工場て精魂込めて造られたホンダ船外機は、世界の海で、湖で、川で毎日フル稼働。ホンダ文化が広まっている。



1953年、ヤマハ発動機創業者の川上源一氏は、欧米で水上レジャーが盛んに行われている光景を目の当たりにし、日本にも後にブームが来ると確信。帰国後、レジャーの本質を知るために、自らクルーザーを所有し浜名湖でクルージングを楽しんだという。使用していたアメリカ製船外機は故障が多く、国産品は故障こそ少ないものの性能面が劣っていたため「無いものなら造ろう」と決断。だが当時は、まだ一般家庭の家電化が始まったばかりで、休日をボートで過ごす発想すらない。そこでまず漁船などの業務需要を対象とし、船外機の

開発に着手。1960年、ヤマハ初の船外機は「P17」で参入し、翌年発売した空冷単気筒の3馬力モデル「P13」が爆発的ヒットとなった。それから50年以上、ボート、ヨット、水上オートバイ、業務艇まで手がける総合マリンメーカーとして、舞台を世界へと移し、進化し続けている。3月に横浜市で開催された「ジャパンインターナショナルボートショー2018」ではモーターボートの旗艦機種を発表。富裕層向け製品の需要拡大を背景に、高級化や大型化を加速させている。